

『こけしの気持ち』

「(犬に) はい、はい。ジローちゃん。ごめんね、遅くなってね。ちょっと近ごろ寒くなって腰が痛くなってきちゃってねえ。はい。たんとお食べ。あらあら。そんな急いで食べたら喉に詰まるわよお。ゆっくり食べなさい、この子はもう」

「あの一。すみません」

「あら。まあ翔太くんじゃないの。どうしたの？」

「あの一、こ、こけしてください」

「こけし？ うちのこけしでいいの？ まあ珍しいわねえ。翔太くん今までうちのこけしを買いに来たことなんかないじゃない。どういう風の吹き回し？」

「こけしが欲しいんです」

「あ、そう。へえ。嬉しいわあ。まあうちはお土産物屋さんだけど、こけしばっかりだからねえ。(犬に) ちょっと待っててね。ジローちゃん。なんでまたこけしを買いに来たの？」

「え？ 別に、なんとなくだよ」

「なんとなく？ こけしをなんとなく買うの？ 変ねえ。翔太くんがなんとなく買うの？ なんとなくでこけし買う？ どうかしらねえ。このへんに住んでる人が、なんとなくで買う物じゃないけどねえ。お土産物だからねえ。本当になんとなく？」

「いいじゃんかよ。買いに来たんだから。僕はお客さんなんだよ。こけし売ってよ」

「そりゃいいけどもさあ。なんとなくで買うかしらねえ。じゃあ翔太くんはなんとなくでこけしも買うし、なんとなくで山に登るし、なんとなくで学部を選んで、なんとなくで政党に投票するのかしら？」

「なんだよ、それ！ そこまで言うことないだろ。だいたい僕が投票に行けるのは8年後だよ」

「あら、そう。その時はなんとなくで選んだりしないでね」

「ちゃんと考えるよ！ なんとなくでこけし買っちゃ駄目なのかよお。…プレゼントだよ」

「プレゼント？ こけしを？ 誰に？」

「誰でもいいだろう。ねえ戸田のばあちゃん、いいからこけし売ってくれよ」

「はい、はい、わかりました。きっと好きな女の子にあげるのね。(犬に) 翔太くんが恋をしたみたいよお。で、その子にうちのこけしをあげるんだってさ。嬉しいわねえ。プレゼントに選んでもらっちゃってねえ。なかなかスミにおけないわねえ。本当にこの子はいやらしい」

「ちょっと！ そのジローに言う感じでこっちを責めてくるのをやめてよ！ じゃあいいよ。買うのやめるから」

「冗談でしょ。もう。こんなことで怒ったら乙女心なんて生涯つかめないわよお。(犬に) ねえジローちゃん。『うん！ つかめないつかめない！ 絶対つかめない！』ほら、ジローちゃんもこう言ってるわよお」

「言ってねえよ！ なんにも分かってない顔でこっちぼんやり見てるだけだろ！」

「そんなことないわよねえ。翔太くん、案外ジローちゃん色んなこと分かってるのよ。ねえ、ジローちゃん。『うん！ 分かってる分かってる！ 森羅万象ぜんぶ分かってる！』ほら」

「森羅万象とか言うわけないだろ！ (犬に) ねえ、お前の飼い主は商売する気ないの？ こんなことばかり言ってるよ。なんとかしてよ」

「どんなこけしがいいの？」

「急にだなあ！ どんなこけしって、えっと。あ、戸田のばあちゃん、こけしってみんな顔ちがうんだね」

「そうよお。うちのはみんな手作りだからねえ。もちろん似たような顔もたくさんあるけどね。厳密に言ったら、全部ちがう顔なの。人間と同じよ」

「へえ。面白いね。ここに住んでるのに、そんなの全然知らなかった」

「そういうものよ。すぐ近くのことは案外知らないもんでしょ？ そこに大事なこともあったりするからね。(犬に) ねえ、ジローちゃん。『そうそう！ 大事大事！』」

「ふーん。あ、これなんか怒ってる顔みたいに見えるよ」

「どれ？ ああ、それね。そうそう。それは怒ってるのよ」

「え？ほんとに怒ってるの？ 怒ってるこけしなの？」

「そうそう。ほら、これ全部うちの亡くなったお爺さんが作ったやつでしょ。うちの人はね、こけしを作る時に、なぜそのこけしはその表情をしているか、みんな考えてから作るの。だから、ここにあるこけしはそれぞれにそれぞれの気持ちがあるのよ。この怒ってるのもちゃんと怒ってる理由があるの」

「ええ？ そうなんだ。え、なんで怒ってるの？」

「投げたティッシュがちゃんごみ箱に入らなかったから」

「なにそれ？ そんなんで怒ってるの？ というか、そんなんで怒ってるこけしをお爺ちゃんが作ったの？」

「そう。やっぱり、これは全然売れないわね」

「そりゃそうだよ！ 怒ってる顔な時点でそうだし、その顔の理由がそんなだったら売れるわけないよ」

「翔太くん、これ買う？」

「買わない。もっと良い顔の奴を買うよ」

「あら、そう。じゃあこれなんかどうかしら。ほら、ちょっと微笑んでるやつ」

「あ、これ良いかも。目を細めて口がちょっと笑ってるね。これはどういう気持ちでこんな表情してるの？」

「これはね、やがて世界征服をしてやろうって顔をしてるの」

「世界征服！？ なんだそのこけし！ こんな優しく微笑んでるのに中ではそんな恐ろしいこと考えてるの！？」

「顔から中身は読み取れないものよお。人間と同じ。翔太くん、これ買う？」

「買わないよ。顔は良いなと思ったけど、そんな奴なんだったら買わない。誰が買うのさ」

「あら、そう。でもピッコロ大魔王が買うかなあと思って」

「実在しないじゃんかよ。ピッコロがこけしが買うわけないだろ」

「じゃあこれなんかはどうかしら？」

「ああ。まあこれはなんか普通の感じするけど。別に悪くはないと思うけど、これはどういう気持ちでこんな顔なの？」

「これはね、自分が普通であることに悩んでるんだけど、結局個性なんてものは幻想で、無理して作ろうと思ってもできるものでもないし、普通が一番いいなんてことも言うし、どうあがいたっておれは普通でしかないんだな、って思ってる顔」

「複雑だよ！ おれは普通でしかないんだなって思って、こんな顔になるの？ そんなに悩んでたの？」

「まあねえ。若い時ってのは他人と比較してすぐに自分がどうなんてことを思っちゃうけど、そんなのは働きだしたら考えてられなくなるからね」

「なんの話してんだよ。ちょっと待って。一番、普通な感じのこいつまでそんなことを思ってるの？ じゃあこれは？」

「ああ、それ？ それはね、ちょっと悲しそうな顔してる感じしない？」

「あ、うん。そうだね。なんだか寂しげっていうか」

「そうなの。それはね、ある朝自分がカブトムシになって、家族が自分のことを忘れてしまっ
て生活をしていて、そんな家族の声を聞いてるうちに何とか自分の存在を分かってもらおう
と色んなことをしてみるんだけど、家族は自分をカブトムシとしか捉えてくれなくて、その
うち自分はもうカブトムシとして生きていくしかないんだなと悟り、でもそんな自分でもこの
家族のためにできるんじゃないか、自分はどうやって残りの生を全うするか、苦しみながらも
必死で考えて、ある朝ふと気づいてみたら…」

「長い長い長い！ 長いよ！ 聞いてらんないよお。もう最初の『ある朝自分がカブトムシに
なっって』の時点についていけないよ！」

「そう？ まだ続きでクワガタの登場があるんだけど」

「聞いてらんない！ もうこいつが変な奴にしか見えなくちゃったよ。じゃあこれは？ この
楽しそうな顔の奴」

「それは、明日プールに行くの楽しみって顔」

「短いな！ これはそんな短いんだ。えー、じゃあもうこれにしようかな。顔はウキウキして
る感じだし」

「いや、それはその後プールで溺れるから、やめた方がいいわよ」

「なんで後の物語まであるんだよ。もう、全然決められないじゃないか。どれもこれもどんな
物語があるのかなって考えたら、重いよお」

「これがいいわよ」

「え？ それ？ それがいいの？ なんで？」

「これはね、大切な人を想ってる、っていう顔」

「…へえ。そんなのあるんだ。いいじゃん」

「あら。やっぱり翔太くん、好きな子にあげるのねえ。まあいやらしい」

「なんだよ！ 応援してくれる感じじゃないのかよ」

「応援するに決まってるでしょ。ちなみに誰が好きなの？」

「そんなの聞かないですよ。…でも、こけしが好きなんだって。集めてるんだって」

「ああ、そう。うまくいくといいわね。(犬に) ねえジローちゃん。『うん！ がんばれよ！
フラれんなよ！ 慎重に行けよ！』慎重に行った方がいいんだって」

「なんでジローにアドバイスされてんだよ。でも、ありがとう。じゃあ戸田のばあちゃん、こ
れください」

「はいはい。ありがとね。子どもにはちょっと高いけど大丈夫？」

「うん。おこづかい貯めたから」

「ふーん。(小声で) 頑張ってるね」

「う、うん。あれ、ジロー。どこ行くの？」

「ああ、大丈夫よ。その入り口のところで止まるから」

「え？ あ、ほんとだ。止まって座って外を見てるね。何してんの？」

「ああ。それね。待ってるのよ」

「待ってる？」

「うん。この子、うちのお爺さんが子犬の時にもらって来た子でしょ。うちの人によく懐いてたからね。今でもああやって、お爺さんの帰りを待ってるの」

「え？ でも、お爺さんってもう…」

「そうそう。いなくなっちゃったからねえ。帰って来ないんだけどね」

「なんか可哀想だね」

「そんなことないわよ。犬は主の帰りを待つっていうでしょ。きっと帰って来るって信じて待つのも、犬の暮らしたから。あと、賢い子だからね。ほんとは分かってるから。ねえジローちゃん。『うん！ 賢い賢い！ ぼく賢い！』」

「そんなこと言ってないだろ！ そんな背中じゃないよ。おばあちゃん、今日言ったジローの気持ち全部ちがうと思うよ」

「そうかしら？ はい、どうぞ(こけしを渡す)。翔太くん、大事な人は、大事にしてね」

「う、うん。ありがとう。小学生には重いけど…。また来るね」

「うん。いつでもおいで。ジロー、翔太くん行くから、そこどいてあげて。はいはい。また買いに来てね。もっともっと色んなこけしがあるからね。はい。ジロー、こっちおいで。はい。よしよし。翔太くん、うまくいくといいわねえ。『おばあちゃん、大好きだよ』あらまあ、ありがとう。おばあちゃんもジローちゃんのこと、大好きよ」

おわり

